

「十字架の言葉に立つ」

ガラテヤの信徒への手紙 3章 1－6節

森島 牧人 牧師

パウロの手紙には、手紙の常識的な形を外れて私たちを驚かせる、激しい言葉で書かれているものがあります。今日の聖書でもパウロは、ユダヤから来た教師たちに惑わされて、不安に陥っているガラテヤの教会に対して、激しい言葉をぶつけています。それは「ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち」というもので、ある神学者はこの部分を「馬鹿な、ガラテヤの人たち」と翻訳しています。主イエスが、山上の説教の中で、「兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。」（マタイ 5：22）と言われているので、パウロは何を考えているのかと思ってしまうところです。

しかしその主イエス御自身が、同じような言葉を使っておられるところが聖書にはあります。それは広く知られている「エマオ途上」の場面です。自分たちの師が殺されてしまったという絶望的な思いを持って村へ帰ろうと急ぐ二人の弟子に近づき、道連れとなられた復活の主イエスが、それが主イエスだとは気づかず、暗い顔で師の死を語る二人に、「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」（ルカ 24：25・26）と言われたのです。そして続けて、御自分の十字架での死は、彼らの救いのための神の出来事であったと、聖書全体にわたって説明された聖書は記しています。

ガラテヤの信徒へのパウロの思いは、この時の主イエスの思いと同じものだと思います。つまり手紙を受取ったガラテヤの人々もびっくりしたであろうこの激しい言葉には、ガラテヤの信徒たちが福音の正しい理解に立ち戻って欲しい、主イエスの出来事が何であったかのかをもう一度しっかり聞いて欲しいというパウロの思いから発したものでした。

この中でパウロは、主イエス・キリストに関する正しい理解を一言で言っています。それは「目の前に、<イエス・キリストが十字架につけられた姿で>ははっきり示されたではないか。」という言葉です。そしてそれが神のなされた<出来事>であるとするなら、それが<何であるか>、私たちにも分かるのではないかというのが、今日のテーマであります。私たちの信仰によって立つ出来事、それが十字架であり、それこそが福音そのものなのである。ですからこの<十字架>の意味が、つまり言葉化された十字架の意味が理解されるならば、惨い十字架の向こう側に<神の愛>が見えるのではないか。そのことは、<言葉>を持って伝えなければならない故、パウロは<十字架の言葉>と言ったのです。

この「目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたではないか」とのパウロの言葉ですが、原文では語順が異なっています。「目の前に、イエス・キリストが公然と示されたではないか、十字架にかけられたままで」となっています。「十字架にかけられた」という部分が強調される形で文章の最後に置かれ、しかも「・・・ままで」がつけられているのです。この「ままで」が意味するもの、それは十字架の出来事は昔の物語ではないということです。確かに二千年前の出来事ではありますが、主イエスの出来事（十字架と復活）は、今の現実である私たちの前に、聖書を通してはっきりと見える形で示されているということでもあります。

パウロが主イエスと出会ったのは十字架の出来事後、教会を迫害するために急ぐ道の途中でした。この時、十字架の意味を理解し、同時に旧約（神の約束）の意味するところをはっきりと理解したパウロは、使徒となり、教会を作る一人となっていたのです。

ガラテヤの教会の人々は、主イエス・キリストの出来事こそが信仰のベースだとパウロに教えられ、それを守って来たはずであったのですが、彼らの前に現れた、<イエスの出来事だけでは不十分であり、律法の遵守を加えないと決して救われない>と説くユダヤ教の色彩を持った教師に動揺し迷っていたのです。そこでガラテヤの教会の人々に向かってパウロは、そうではないと、厳しい内容の手紙を送り、我々の福音は<十字架の言葉のみ>、十字架の出来事をきちんと理解して行く言葉のみであると厳しく説いたのです。

しかし、このパウロの言葉はガラテヤの教会だけではなく、現在の私たちに向かっての言葉でもあります。イエス・キリストの十字架の出来事、これこそが福音、これこそが私たちの信仰のベースです。神の子である主イエス・キリストが私たちのために十字架にかけられた、それこそが神の恵み・神の愛の出来事なのです。パウロの手紙は、二千年後の今も、それを私たちに伝えようとしているのです。

（説教要約 羽入田悦子）